

釈尊の弟子たちはどのように輪廻を理論化したか — 部派仏教の輪廻観 —

○三蔵

經（經典）（仏陀の教え）
律（戒律）（仏陀の定め）
論（アビダルマ）（教えの考察）

} 相違 → 部派（アビダルマ仏教）

○アビダルマとは

無垢の慧とおよび〔それに〕伴う〔法〕とがアビダルマである。

また、それを得るための〔慧〕なるものも、論書なるものも〔アビダルマ〕である。

(AKBh I-2ab)

…これ（アビダルマ）は、究極の目的なる法、すなわち涅槃、に、あるいは〔個々の〕法（dharma）相に、対向（pratyabhimukha）から、アビ・ダルマ（対法）なのである。

…

○諸法を〔正しく〕弁別すること以外に、煩惱を鎮めるためのすぐれた方法はない。そして煩惱によって世間〔の有情〕はかの有（輪廻的生存）の海に漂う。

かくてこのゆえに師（仏陀）によってこ〔のアビダルマ〕は説かれた、と伝説する。

(AKBh I-3) (櫻部建『俱舍論の研究 界・根品』法蔵館)

○釈尊の教え

靈魂の存在や来世の存在などの「哲学的」な問題には関わらない。

「苦悩」の解決こそが重要。⇒「四諦」としてまとめられる。

（「毒箭（毒矢）の例え」：毒の処置が先で、射手等の詮索は急務ではない。）

○十難無記（*Majjhima-Nikāya* 63 Cūlamālunkyasutta；『雑阿含経』「毒箭経」）

世界は（1）常住であるか、（2）無常であるか、（3）有辺であるか、（4）無辺であるか、
身体と靈魂は（5）同一であるか、（6）異なるか、

如来は（7）死後に存しないか、（8）死後に存するか、（9）死後に存しかつ存しないか、
（10）死後に存するのでもなく存しないのでもないか、

『スッタニパータ』（第三 大いなる章、九 ヴァーセッタ）（中村元『ブッダのことば』）

「生まれによってバラモンになるのか」「行為によってバラモンになるのか」

○アビダルマの無我の考察

世界を様々な構成要素（ダルマ）に分けて、考察する。

構成要素は、それぞれ独自の特徴（自相）をもつ

⇒「法有」として、大乘仏教により批判される。

○アビダルマを代表する説一切有部の個体存在

刹那滅の構成要素の集合体の連続（相続）

「諸蘊は刹那性のものであるから、それら自身には移り行く能力はない。しかし、諸煩惱と諸業とに条件付けられて、蘊に過ぎないもの（skandhamātra）が、中有とされる相続を経て、母胎に至る。たとえば、灯火は刹那性のものであっても、相続を経て、他の場所に至るから、これに過失はない。」（AKBh 129, 17-20）

○原因と結果：六因（四縁）五果

- ・能作因—増上果：妨げにならないから結果的に生起を助ける
- ・俱有因—士用果：互いに同時に因であり果である
 - 相応因—士用果：心と心作用（心所）
- ・同類因—等流果：自らと同じ性質の果を生ずる
- ・遍行因—等流果：遍行惑と呼ばれる強力な煩惱
 - 遍行惑：苦聖諦についての五見と疑と無明、
苦集聖諦についての邪見と見取見と疑と無明
 - 五見：①有身見：常住のアートマンが存在する、これやそれがわがものである
②辺執見：一切は無である、一切は常である
③邪見：因果関係は存在しない
④見取見：誤った見解に固執して、それだけが正しいとする
⑤戒禁取見：仏教以外の宗教の生活規範に固執して、それだけが正しいとする
- ・異熟因—異熟果
 - 善因楽果、悪因苦果（業による因果関係）
 - 善でも悪でもない行為は、結果を引き起こさない
 - 順現法受業：業を為したのと同じ世にその果報を得る業
 - 順次生受業：次の世においてその果報を得る業
 - 順後次受業：第三生以降にその果報を得る業

○善悪の定義

- 勝義善：解脱（一切苦の止息）
- 自性善：三善根（無貪・無瞋・無癡）と慚・愧
- 相応善：自性善と同時因果となっている心・心作用
- 等起善：身業、語業、有為の四相、得、滅尽定、無想定（相応善により引き起こされたもの）

- 勝義不善：輪廻
- 自性不善：三不善根（貪・瞋・癡）と無慚・無愧
- 相応不善：自性不善と同時因果となっている心・心作用
- 等起不善：身業、語業、有為の四相、得（相応善により引き起こされたもの）

- 慚：みずからに恥じて慎むこと
- 愧：他者に恥じて慎むこと

○四有

生有：生まれる一刹那

本有：生まれてから死ぬまでの生存

死有：死ぬ時の最後の一刹那

中有：死んでから生まれ変わるまでの中間の存在

○中有

・ガンダルバ（健達縛、gandharva）（香を食す）

三つの状態が現前する時、母の子宮に胎児が生じるに至る。即ち、①母が健康で月経がある、②父母が愛し和合する、③ガンダルバがその場に存在するときである。

・次の生存の形態をとる（ボサツは、若い男性の姿）

・期間

大徳：定まっていない

世友：7日（または7日を繰り返す）

餘の諸師：七七日

毘婆沙師：短時

○母胎に入る時（Cf. AKBh 128, 15-21）

・「力が弱いもの（alpeśa、小福者）」

風が吹き、雨が降り、寒く、悪天候で、あるいは、大群衆の喧騒があつて、「ああ、草の茂みに入ろう」、あるいは、「木々の茂みに／草の庵に／葉っぱの庵に入ろう」、「木の根もとに寄ろう」、「壁の側に寄ろう」といって、母胎に入る。

・「力が強いもの（maheśa、大福者）」

「遊園に入ろう」、「園林に入ろう」、「宮殿に／高樓に／座に上がろう」といって、母胎に入る。

・ボサツはすべて正しく認識する

○胎内五位

カララ（羯刺藍、kalala）（凝）：受胎後の7日間

アルブダ（頰部曇、arbuda）（胞）：第2の7日間

ペーシー（peśī、閉尸）（血肉）：第3の7日間

ガナ（ghana、健南）（堅肉）：第4の7日間

プラシャーカー（praśākhā、鉢羅奢佉）（支節）：第5の7日間以後出生まで

ここで、髪、毛、指の爪等、感覚器官が出来上がる

○出生

時が経過して、成熟を得た胎児であり苦痛を与えるものの中より、母胎の中において、異熟より生じた風が吹き、それが、胎児であり苦痛を与えるものを回転させて、母の身体の〔液体が〕流れ出る出口（kāyāvaksaradvāra）に向くように置く。

彼が、固い大便の塊のように、その場所から脱する時は、非常な苦しみを引き起こす。

もしも、母親が、食・住・生活を怠ることによって、または、〔胎児の〕過去の業の不具合によって、胎児が死に至った場合には、これを察知した女たちや妊婦の介護者たちは、程よく温かい酥油やごま油、よく挽かれたシャルマーリーのペースト、または他のものを手に塗って、その手に鋭く細い刃を固定し、糞溜のように強烈な悪臭があり、真っ暗で、諸々の汚わいの池であり、幾多幾千の蛆の類の住所であり、常に液体が滴り、精液と血液と尿と垢とによってジメジメし、ジトジトし、ジュクジュクしており、非常に嫌悪を起こさせる姿をしており、穴のあいたうす膜で覆われ、過去の業によって生じた、身体の裂け目に、手を挿入し、肢節を個々に分断して、引き出す。そうすると、その胎児は、後の世に結果を感じる過去の業によって、ある生存に導かれる。

もしも安産の時は、子どもを欲する母親あるいはその女召使が、生まれたばかりの赤剥けのような〔赤子の〕身体に、刃や酸のような感触の両手で持って、産湯を使わせる。母乳と新鮮な酥油とで育て、粗い食べ物も食べられるように、次第に、育成する。

(AKBh 130, 6-17)

○胎外五位

嬰孩 (1~5 歳)

童子 (7~15 歳)

少年 (16~30 歳)

盛年 (31~40 歳)

老年 (41 歳以降)

○命根 (心不相応行法：心とは結びつかないもの)

命根 (jīvitendriya) = 寿 (āyus)

温かさ (体温) と識とを保持するものである (AKBh II-45b)

⇒ 識は死の瞬間まで存在する

衆同分と結びつき、衆同分を維持する

(衆同分：それぞれの有情の類似性をもたらす原理)

異熟 ⇒ それを引き起こした業の力が失われれば死が訪れる

身根 (触覚を司る器官) と「意」は共に滅する

悪趣に趣く者の「意」：足において滅する

人の中に趣く者の「意」：臍において滅する

天の中に趣く者の「意」：心臓において滅する

不時解脱の阿羅漢で第四静慮を得たもの

富を得る業を転じて、寿命を延ばすことができる (留多寿行)

寿命を縮めて、富を得ることができる (捨多寿行)